

日本國語大辭典

第十三卷

編集

日本大辭典刊行会

発行

小

学

館

日本国語大辞典 第十四卷

昭和五十年三月一日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第一版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相 賀 徹 夫

印刷者 小 林 清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二丁目三十一番
〔郵便番号〕一〇〇一〔振替〕東京八二二〇〇

一造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

編集顧問

金田一京助
佐伯梅友
新村出
時枝誠記
西尾實
久松潛一
諸橋轍次
山岸德平

編集委員

市古貞次
金田一春彦
見坊豪紀
阪倉篤義
中村通夫
西尾光雄
林井栄大
松井栄一
馬淵和夫
三谷栄一
山田巖
吉田精一

(五十首順)

原実兼。徒然草「四、あやしの竹のあみ戸のちより」

たけの嵐(あらし) 竹の林に風が吹いて、さわさわと音をたてること。山家集「下、たまがく露ぞ枕にちりかか夢をどろかす竹の嵐に」

たけの魚(うお) 根曲竹(ねまがりたけ)に虫が寄生、産卵してできた虫。笹魚(ささうお)。

たけの台(うて) 清涼殿の東庭にある籬垣(まがき)の小さい方形の囲いで、一つには淡竹(はちく)を、一つには漢竹(かんちく)を植えたもの。呉竹の台と川竹の台との称。竹のだい。十訓抄「臨時試案時実方折具竹為插花事、舞人に加として竹の台にすすみよて、具竹の枝を折てさしたりける」。建武年中行事「三月、舞人闕殿の束帯にてすすみ出、竹の台のもとにて、竹を折てかざしにす」。新古今「賀、八〇七、君や今はらぬ色に契るらん竹の台の万代のかげ(足利義教)」

たけの燧(おき) (竹の燧は長持ちしないとこゝろから) すく消えること。転じて、すく忘れることと持統しないこととたえ。雑俳かぐや姫「おしゆれど、愚人抜けども竹の燧」

たけの落葉(おちば) 夏に竹の新葉が生え、それまでの葉が落ちたもの。季、夏。俳諧「泉日記、六月、二日、露をいなせて竹の落葉かな」。俳諧、発句題「夏、上、眠たさに出て掃く竹の落葉哉(護物)」

たけの皮(かわ) 母親見出し

たけの下駄(げた) 「たけげた竹下駄」に同じ。雑俳「うたたね己(おの)が気が割って見せたる竹の下駄」

たけの煙(けむり) 竹の林が、遠くから見ると、煙のように淡く見えるさまをいう語。新葉雜中「二、二、立まじる友をも何か松の霧竹の煙の山陰の庵(藤原公冬)」。和訓栞「たけのけむり松の煙木の芽のけむるなどの類に竹も遠く見ればけむるか如く見ゆるなり」

たけの子(こ) 母親見出し

たけの籠(かご) 竹を編んで作った籠(かご)。物を盛て運ぶのに用いる。書紀「神代下(寛文版訓)」「所謂の堅間(かたま)は是れ今の竹籠(たけのこ)なり」。字鏡集「養、スノコ、タケノコ」

たけの先(さき) 竹の先がゆれ鈴がよく鳴るところから、おしやべりのたとえにいう。

たけの時雨(しぐれ) 竹の葉に降りそそぐしぐれ。また、竹の葉のすれあう音をしぐれの降る音にたとえていう。俳諧「俳家奇人談、中原宇古「なつかしき竹の時雨や庵の跡」

たけの小道(したみち) 竹の生い茂った下を通っている道。壬二集「かよひこし竹の小道跡たえてくづれにけりな淀の川岸」。新撰六帖「我鹿のかきねの袖の朝戸出に雪おれくる竹の小道藤原光俊」

たけのす文字(もじ) 箆(たけのこ)すしをいう女房詞。御湯殿上日記「永祿二年六月八日、ふしみはしゆるんよりたけのすもししん上申さるる」

たけの園(その) ①竹の生えている園。竹藪。竹の園生。竹園(ちくえん)。②(中国、漢の時代、梁の孝王の庭園に竹を多く植え、修竹苑と名づけたところから) 皇族をいう。竹園。竹園。御室五十首「色かへぬ竹のそのなるうぐすすはくよろづ代の春をまつらむ藤原公繼」

たけの園生(そのう) ①「たけ(竹)の園(その)に同じ。続古今「維下、七九八、日くるれば竹のそのふにゐる鳥のそこはかとなく音をも鳴哉」②「たけ(竹)の園(その)に同じ。玉葉賀「一〇八一、仕へつ竹くす急遠く頼むかな竹の園生に代てをさねて神助」。徒然草「竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんことなき。増鏡「一五、むら時雨竹のそのふはげれど、秋の宮の御はらには、ただ一品内親王ばかりものし給を」。開園タケノコノ會(二) ④ ⑤ ⑥

たけの台(だい) 「たけ(竹)の台(うて)な」に同じ。茶花歌合「かすさしものは、うちのおまへとおぼしくて、たけのだいよりぬきいでたるをかずにはしたり」

たけの神水(たまりみず) 竹の中にあるたまり水。端午(たんど)の日の午(うま)の刻に雨が降り、それが竹の節の間にたまったものを薬水に用いると靈験があるとされた。季、夏。俳諧「滑稽雑談、五月、竹中神水タケノタマリミン」

たけの筒(つつ) 竹の幹を横に切つて筒にしたもの。竹筒。新撰字鏡「筍、竹筒、竹乃乃豆(ツツ)をねちち入て片端をば仏の鼻にねちち入れて」。温故知新書「筒タケノツツ」。雑俳「天神花「だして、お、銭のかんばん竹のつつ」。隨筆「足新翁記「二、せんべいは竹の筒におさる。うんばはめん棒におさる」。開園(竹)名義(藤原)書

たけの戸(と) 「扉(と)ばそ」。たけ(竹)の編戸(の)に同じ。建久三年「供供合、ふしなれぬほどをばゆるせ竹のとにも風も夜さむの時はきぬとも藤原頭氏」。古今著聞集「一七、六〇、四、竹の戸のかたに、人の音するを見やりたれば」。太平記「三三、飢人投身、或は片田舎に立忍、桑門、竹扉、たけノトホノに住みわび給へば」。読本「雨月物語吉備津

の釜「竹の扉(トボ)のわびしきに、七日あまりの月のあかきし入て」

たけの燈火(ともし) 三本の棒を紐でむすんで支脚として、上に油皿を置いて火をとすようにしたもの。結び燈台。六百番歌合「冬、二八番、あまた度竹のともし火挑けてぞ三世の仏の名をば唱ふる藤原季尊」。養孝法印集「よもはや竹のともし火更に燈とななる御名や残り少なき」

たけの根(ね)の鞭(むち) 竹の根の節近(ふし)ちかの部分で作った鞭。出陣日記「陣にて竹の根のむち、なし地の鞍、青毛の馬、此之色を、於御当家庭らふなり」

たけの葉(は) ①竹についている葉。更級日記「竹の葉のそよぐ夜ごと寝ざめてなにもなきに物ぞ悲しき」。書言字考節用集「六、善タケノハ竹葉也」②(中国で、酒の異称を竹葉(ちくよく)というところから) 酒をいう。散木奇歌集「竹の葉に浮る菊をかたぶけて我のみしづむなげきをそへて」。久安百首「秋下、竹の葉に籬の菊を折りそへて花をふくらん玉のさかづき藤原隆季」。語曲「紅葉狩「さなきだに人心、乱るる節は竹の葉の露ばかりだに受けじとは」。開園(竹)書

たけの花(はな) 竹の枝の基部から出る花穂。真竹や淡竹(はちく)は六〇年、笹は三〇年に一回花をつけるという。季、夏。和玉篇「簾タケノハナ」。開園(竹)書

たけの鼻(はな) 高い地所に竹を植えて、水害や風を防ぐようにした所。地名になったものも多い。たけの花入(はな) 茶器の一つ。茶花を入れ、竹製のもの。茶道が成立し、佗(わ)びの風姿が尊ばれると、竹製の粗野なものが好まれ、これが普及した。竹の送り筒の手桶形が始めであるが、利休によって、寸切の尺八形や一重切、二重切などが作られた。その後、茶匠の好みによって、さまざまな形式のものが作られた。

たけの葉浪(はなみ) 風のために、竹の葉が波のようになびくこと。曾丹集「うへそよぐ竹のはなみのかたよを見るにつけてぞ夏は涼しいところ。新勅撰「秋上、二七九、ふみわけんものとも見えすあさばらけたけのはやまのきりのしたつゆ藤原家隆」

たけの簪(はら) 陰曆八月をいう。この頃竹の新葉がさかんとする。季、秋。俳諧「滑稽雑談「八月、異名略竹春簪、竹語曰、竹以「八月」為「春」。俳諧「蕪村遺草「おのが葉に月おぼるなり竹の春」

たけの笛(ふえ) すがりが犯行に使用する鉄(はさ)みをいう。盗人仲間(隠語)。「隠語輯覽」

たけの節(ふし) ①竹の幹にあるくきり。季、夏和

本新撰字鏡「節也、竹乃不志」。書論「三竹の節員(かぞ)へ吉凶をトウらなむ」②主として脇障子の上に設ける欄間(らんま)の親柱。竹の節状のくびれを設けたもの。また、竹の節間のことをもいう。匠門殿屋敷、竹の節太さは柱十面の内を、又十を二割、三分おとしてすし。同たつの割用は七つ半と云共、八つ割下の節差分。但ふしを小さと云り」③子どもの髪を結い方の一つ。江戸末期から明治初期にかけて町方の男児の髪形。元結でまげを二か所結ぶもの。茶屋園會拾遺「下、簪品目、略、竹の節」。後開藤名梅ヶ香「三遊亭円朝「一年ごろ十五六の小僧が髪を竹(たけ)の節(ふし)といふ若衆に結ひ」④女性の髪を結い方の一つ。隨筆「飛鳥川「女の子は略、竹のふしといふにも結び、是は其頃も見苦しき也。髪に色々の節もなし、漸々水引やうの物にたかきなど用ゆ」⑤女性の髻(もとどり)に差した中差しの一つ。隨筆「守貞漫稿「一、竹之節、此竹節の如きは筭に近く簪とは云ず。是等形筭なれども江戸今俗は専ら中差と云也」⑥「たけ(竹)の節」に同じ。書言字考節用集「八、硬節、タケノフシ、開基所言」。雑俳「百衛現いては、竹のふし云ふ基の助言」⑦母親見出し。開園(竹)書

たけの節(ふし) 高台(こうだい) 茶碗の見どころの一つ。茶碗の高台の部分が竹の節状になっているもの。井戸茶碗に多い。

たけの簪(ふたおき) 茶道で竹製の釜の蓋置。節のないものを吹貫(ふきぬき)といひ、季節を選ばずに用い、風炉用は上節、炉用は中節と定められた。どれも、逆竹(さかたけ)に切る。利休の考案によるといわれる。引切(ひききり)。

たけの二股(ふたまた) (二股に分かれた竹はまれば、二股(ふたまた)めつたにないこと、ほとんどないもの)とたえ。

たけの丸(まる) 紋所の名。葉のついた竹をたばねて円形に図案化したもの。笹の丸。浄瑠璃「伽羅先代萩「二夜目にきらめく門構みが立たる金物の、紋も羽をのす竹の丸冠者太郎義綱の上屋敷」。開園(竹)書

たけの糞(ふ) メダケ、クマザサ、スズタケなどイネ科竹、笹類の糞。小麦に似た長楕円状で胚乳(はい)にゆるは澱粉質に富み、粉にして食用とするが味は悪く、救荒食に利用する程度である。自然航(じねん)。延喜式「二、治部省省(経略)人參生入是知皆生、竹実満ハ満成也」。日葡辞書「agononimi、形如小麦、以為荒年之兆、又藤原所食竹実非是詳本草」。俳諧「春鴻句集「春、人と竹はぬ宿や竹の実落椿」。開園(竹)書

たけの緑(みどり) 竹の葉の緑色。色の変わらな

いこと、長く変わらないものたえ。・拾遺雜賀二七七、白雪はふりかくせどもちよまでに竹のみどりはかはらざりけり(清原元輔)。・堀河百首雜、木の葉散折りふし毎にかはらねば幾世をふべき竹の緑ぞ(肥後)。・統千載、雜体七・一六、代々をふれども色変へぬ竹のみどりのすゑの世を(小大進)。

たけの宿(やど) 竹藪などの中にある家。また、竹でつくった粗末な家。見すばらしい家。・春夏秋冬夏(河東碧梧桐)高浜虚子稱「信楽しがらきや鮎餅つくる竹の宿(松瀬青々)。・妻木松瀬青々、新年飾竹してみやびたり竹の宿」。

たけの節(ふし) 竹の幹の節(ふし)と節との間。・新撰字鏡「茶竹筒・竹乃与」。古今雜下九五九「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべら也(よみ人しらす)」。[附]新撰字鏡・名義

たけの夜床(よど) 竹で作った床に夜寝ること。また、その床。・新撰六帖「雪ふりて竹の夜床の寒けきゆるす衣の御代やきてまし藤原家良」。・妻木松瀬青々夏「寺に寝る竹の夜床や時鳥」。

たけの縫綱(よりづな) 竹をよって作った綱。・夫木二「うき橋に竹のよりづなうちはへてお舟ならぶるふじの川なみ(慶應)」。

たけの割下駄(わりげた) 「たけげた下駄」に同じ。・雑俳、猿蓑十五形なる絵を習ひたる会津盆(風蘭)「うす雪がかる竹の割下駄(史郎)」。

たけ八月(やぶが)に木(き)六月(ろく)が(つ) 竹は八月に、木は六月に切るのが最もよいということ。・宝永落書「人は謂ふ竹は八月六月美濃が腹をば今がきりどき」。・警諭尽三「竹の八月樹六月法事の珠数は今が切時」。・諺苑「竹八月に木六月」。

たけを割ったよう (竹を縦に割ると、まっすぐに割れるところから) 人の性質がさっぱりして、わかりやすいこと。・咄本「一休咄」序「邪なる萌なく竹を二つにわたりたるがごとくの御志なりし也」。・坊っちゃん(夏目漱石)七「坊っちゃん竹を割った様な気性だが、只肝臓が強過ぎて」。

たけ「岳」(たけ)とも、高く大きな山。高山。・古事記上「笠紫の日向の高千穂のくじふる多気タケ」に天降りましましめき。・万葉五・八七三「万世に語り継ぐたけの多気(タケ)に領巾(ひれ)振りながらし松浦佐用姫(大伴旅心)。・源氏若紫「ふじの山にがしたけなど、かたりきこゆるもあり」。・色葉山類抄「嵩タケ山大白嵩山高也。嶽同」。・名語記「四」山の高き峰をたけとなす。如何。たけは嵩也。嶽也」。[附]通鏡味完二(日本地名学科学篇)によれば「嶽」という語尾をもつ山峰は、類岩や崩土を大規模にもつ雄大な山に用いられ、小丘でこの部類に

属するに御嶽社の祀られたものが少なく、後の場合には矢張り、低山ではあるが傾斜が大きく、且つ露岩の多い山である場合が多いという。[附]①山。山岳。(だけ)青森県三戸郡②北アルプスの山の称。(だけ)飛騨③川の上流山岳地方の部落の称。鹿児島県肝属郡高山④信仰と関係ある山の称。福島県南会津郡伊北・長野県上伊那郡⑤伊勢神宮の辺朝熊岳の称。鹿児島県肝属郡百引(高隈岳)⑥(だけ)鳥取県八頭郡西郷⑦(だけ)タカネ(高海)の約(万葉考)名日本語原学(林羅臣・大言海)。(2)タカ(高)の転(日本語原学(林羅臣・大言海)の反(名語記)。(4)山水のある所の意でタケ(出雲の義(和句解))。[附]會中(近世前期は「だけ」か)會之因 今忠平安○江戸○會之因 [附]會中(名義和玉文明・明応・天正・慶長・黒本・易林・書)

たけ「茸」(たけ) ①きのこのこと。[附]「秋」書紀皇極三年三月(岩崎本平安中期未刻)「便ち紫の菌(タケ)雪より挺(たけ)て生ひたり」。二十卷本和名抄「一六」菌茸。崔師錫食経云菌茸(人而容反)上栗殖反上声之重。爾雅注云菌有木菌土菌石菌(和名皆多介)食之温有小毒状如人著(笠者)也。今昔二八・一九「知らぬ茸と思すべらに、独り迷ひ給ふ也けり」。名語記「四」くさひらを松たけ、ひらたけなどいへるたけの心、如何、茸とかけり。女中詞(元祿五年)「たけとききのこ」。俳諧、改正月令博物考八月「茸菌タケとききのこ(茸)タケ(菌)くさびら」かくの如く名を分ちていへども皆茸(タケ)類の惣名にて用いた語。皇太后宮儀式「種々の事忌定給ひき」。

②獸肉をいう。獸の肉を直接にいうのを避けて用いた語。皇太后宮儀式「種々の事忌定給ひき」。時完(し)を多気(タケ)と云ふ。[附]きのこ。福井県43 三重県志摩郡603 京都府4 兵庫府62 鳥取県70 島根県78 岡山県真庭郡730 広島県749 香川県小豆島04 愛媛県周桑郡83 大分県別府府。[附]形が似ているところからタケリ(杜松)の略(名通・大言海)。

(2)丈、竹、葦と同義で直立の意(義注和名抄)。(3)気味のタケキ(猛義和訓栞)。(4)笠のようになつたつところから、タケ(長)タルの義(観字造語抄)。(5)タケ(佗化)の義(言元梯)。(6)タカコケ(高苔)の反(名語記)。

[附]會中(會之因) 會之因 [附]和名色葉名義・書

たけ「名」馬鹿をいう、盗人仲間の隠語。[特殊語百科辞典]

たけ「名」(因)蚕の第二眠。上野66 群馬県多野郡240 埼玉県秩父242 山梨県甲府近在039

たけ「他化」(名) 他人を教へ導くこと。化他。家。ほかの家筋。富家語、他人見習此説如此拜する尤身苦事也。太平記三「笠置軍事」一門、他家宗徒の人々迄を催される。文明本節用集「他家タケ」詩経伝「唐風・葛生(葛生蒙楚、藋蔓于野)

驗婦人外成(於他家) [附]會之因 [附]文明易林書

たけ「接尾語」(希望の助動詞「たい」の「た」に、接尾語「げ」の付いてできたもの) 動詞の連用形に付いて、形容動詞の語幹をつくる。したそうな様子。出てきたげにしている。早く帰りたいな顔など。

たけ「名」(因) 絶壁。がけ。兵庫県美濃郡65 岡山県邑久郡740 山口県柳井71 徳島県阿波郡84 香川県小豆島825 愛媛県87 大分県大分郡89 ②岩の碎片まじりの崩土。がけ。高知県土佐郡土佐山66

たけ「文」(副助) 体言または活用語の連体形を受けて、限り。浄瑠璃・大経師書「山の奥に身をかくし、のがるだけのはがれもせず山近辺をうろたへ」。洒落本「青楼日記」優男の私語「そういふおめへが心ならをれもせいのつづくたけどふなれこうなれ来通さふが」。読売新聞明治二四年一月一日「及ぶべき丈(タケ)の方法を画せん」。それから夏目漱石「一五」其仕打は父の人格を反射する丈(タケ)夫それ丈(タケ)多く代助を不愉快にした。一兵卒の銃殺(田山花袋)九「或は残酷だけされただけ忘れなかつたのかも知れなかつた」。②(1)のうち、特に、それ相応に、にふさわしく、にふさわしい程度に、の意を表す。↓だけに。滑稽本・東海道中膝栗毛四下「さすがは田舎だけ、ものが自由だ」。滑稽本七「初上」無だな孔方をなげうつて置やしただけ(略)まんざら野夫がられもしねへ積りさ」。思出の記(徳富蘆花)二「鉛江は僕と同年で、伯父の娘だけ妙に富麗な女児で」。③(それと限る意を表す)。雑俳「住吉みやげ下駄さへも年玉だけで扇木にのる」。浄瑠璃「平仮名盛衰記」三「我子を我が育てるには、少々の怪家さしても不調法が有ても、親だけで済めども」。浪花聞書「たけ」これだけ夫だけなといふこれぎり夫ざりなり。人情本春色雪の梅「二七回」かし吾等達に隠すだけが、素人のやうで憎らしいのう。多情多恨尾崎紅葉「二口頭(くち)に出したのには、これこれ(耳(タケ)であるが、[附]語源は「山家集中」のものもおもふ心のたけぞしられぬるよなよな月をながめあかした。よなな名詞「たけ(丈)」と考えられる。[附]會之因 タケ(鳥根)タキ(鳥根・伊予・豊後)タキ(豊後)

たけ「他形」(名) 鉱物が固有の結晶形を示さず、周囲の他の鉱物の形に支配された、偶然的な形を示す現象。[附]タケ(會之因)

たけ「他計」(他計) 他のはかりごと。玉葉「寿永二年六月六日「百千萬事、他のはかり、只天下落居之時、可施(徳化)之由、法皇起自(自)厭、可被(被)上御願也。此外他計、一切不可(不可)叶者」。李榕「對憲宗論朋党文」明主願週則進、疑阻則退、不為他計、苟(苟)安其位」。[附]タケ(會之因)

ること。きのこがり。きのこり。《季秋》。古今
秋下三〇九・詞書「きた山に僧正へんせうとたけが
りにまかれりけるによめる」。謡曲盛久ひと年小
松殿北山の茸狩りの遊路の、酒宴において。俳
諧・風流波十五茸タケがりの遊路はこころおもし
ろや。明治三〇年秋茸狩り浅き山々女連。園田タ
ケガリ。園田。園田。

たけかれは「竹枯葉」(名) カレハガ科のガ。前は
ねの長さは雄で二七ミリ、雌で二〇ミリ以内外。
茶褐色で、前後中央に二つの白点紋がある。幼虫
は黄色で、タケ・ササ・ススキなどを食べる。夏に発
生し、各地の平地に多く、山地には近縁種でやや大形
の黄色みを帯びたヨシカレハがいる。園田。園田。
たけかれは「竹皮」(名) 竹(たけ)の皮。これ
を保存しておいて、経木のように主として食べ物な
どを包むのに用いる。社会百面相(内田魯庵)電影
六・妻といふ者を人生の旅をする時腰へ垂下げる竹
皮(タケカハ)の焼飯位に考へておいた。田舎教
師(山田花袋)四四(机の周りに餅菓子のからの竹皮
や)。園田。園田。

たけかわたけは「竹川」(武川)「たけがわ」とも。姓氏
呂(り)よ。一四歌から二三歳の秋まで。夫の髯黒に先
立たれた玉鬘は、娘の大君を冷泉院に差出すが、御
子たちを産んで弘徽殿女御に嫉妬され、里にもどる。
園田。園田。

たけかわは「竹川」(武川)「たけがわ」とも。姓氏
呂(り)よ。一四歌から二三歳の秋まで。夫の髯黒に先
立たれた玉鬘は、娘の大君を冷泉院に差出すが、御
子たちを産んで弘徽殿女御に嫉妬され、里にもどる。
園田。園田。

たけかわは「竹川」(武川)「たけがわ」とも。姓氏
呂(り)よ。一四歌から二三歳の秋まで。夫の髯黒に先
立たれた玉鬘は、娘の大君を冷泉院に差出すが、御
子たちを産んで弘徽殿女御に嫉妬され、里にもどる。
園田。園田。

たけかわは「竹川」(武川)「たけがわ」とも。姓氏
呂(り)よ。一四歌から二三歳の秋まで。夫の髯黒に先
立たれた玉鬘は、娘の大君を冷泉院に差出すが、御
子たちを産んで弘徽殿女御に嫉妬され、里にもどる。
園田。園田。

たけかわは「竹川」(武川)「たけがわ」とも。姓氏
呂(り)よ。一四歌から二三歳の秋まで。夫の髯黒に先
立たれた玉鬘は、娘の大君を冷泉院に差出すが、御
子たちを産んで弘徽殿女御に嫉妬され、里にもどる。
園田。園田。

八センチの尾状花穂に雄花を密生する。雌花穂は
長さ約二センチで短枝の先に直立する。そうしか
んば。物品識名拾遺「タケカンバ、樺木(しらかん
ば)一種、日本植物名彙編(三)「タケカンバ」
園田。園田。
たけかんむり「竹冠」(名) 漢字の冠の一つ。「箆」
「笠」などの頭にある。「竹」の称。この冠の字の大部分
は字典の「竹」部に属する。たけかぶり。たけかむり。
園田。園田。

たけかむり「竹冠」(名) 漢字の冠の一つ。「箆」
「笠」などの頭にある。「竹」の称。この冠の字の大部分
は字典の「竹」部に属する。たけかぶり。たけかむり。
園田。園田。

たけかむり「竹冠」(名) 漢字の冠の一つ。「箆」
「笠」などの頭にある。「竹」の称。この冠の字の大部分
は字典の「竹」部に属する。たけかぶり。たけかむり。
園田。園田。

たけかむり「竹冠」(名) 漢字の冠の一つ。「箆」
「笠」などの頭にある。「竹」の称。この冠の字の大部分
は字典の「竹」部に属する。たけかぶり。たけかむり。
園田。園田。

たけかむり「竹冠」(名) 漢字の冠の一つ。「箆」
「笠」などの頭にある。「竹」の称。この冠の字の大部分
は字典の「竹」部に属する。たけかぶり。たけかむり。
園田。園田。

たけかむり「竹冠」(名) 漢字の冠の一つ。「箆」
「笠」などの頭にある。「竹」の称。この冠の字の大部分
は字典の「竹」部に属する。たけかぶり。たけかむり。
園田。園田。

たけかむり「竹冠」(名) 漢字の冠の一つ。「箆」
「笠」などの頭にある。「竹」の称。この冠の字の大部分
は字典の「竹」部に属する。たけかぶり。たけかむり。
園田。園田。

い。と屁をひり寝美をもらう。それを近所の爺が
真似して失敗するといったもの。屁ひり爺。園田
タケキリジ。園田。
たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。
たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。

たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。

たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。

たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。

たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。

たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。

たけきり「竹打撃」(名) 「だり」(打撃)に同じ。
園田。園田。

たけくそく「竹具足」(名) 竹を編んでよりの胴の
形に作ったもの。剣道や槍(やり)のけいこに用いる。
歌舞伎・天衣粉上野初花(河内山)序幕、此の後より
試合装の門弟四人好みの髪後巻、袴、袴古着、竹具
足(タケグソク)装にて竹刀を持ち出たり。歌舞伎、
水天宮利深川(筆先幸兵衛)序幕、泥六散髪小倉
の袴にて、竹具足(タケグソク)を担ぎ。園田。園田。
たけくま「武隈」宮城県沼市古称。古代、陸奥国
国府(武隈)たけくまのたてが置かれ、名取鎮所が
あった。俳諧大坂壇林桜千句「三本の松の葉こ
しに後の出は本秋、吸物いそげおくの武隈夕鳥」
園田。園田。

たけくま「武隈」宮城県沼市古称。古代、陸奥国
国府(武隈)たけくまのたてが置かれ、名取鎮所が
あった。俳諧大坂壇林桜千句「三本の松の葉こ
しに後の出は本秋、吸物いそげおくの武隈夕鳥」
園田。園田。

たけくま「武隈」宮城県沼市古称。古代、陸奥国
国府(武隈)たけくまのたてが置かれ、名取鎮所が
あった。俳諧大坂壇林桜千句「三本の松の葉こ
しに後の出は本秋、吸物いそげおくの武隈夕鳥」
園田。園田。

たけくま「武隈」宮城県沼市古称。古代、陸奥国
国府(武隈)たけくまのたてが置かれ、名取鎮所が
あった。俳諧大坂壇林桜千句「三本の松の葉こ
しに後の出は本秋、吸物いそげおくの武隈夕鳥」
園田。園田。

たけくま「武隈」宮城県沼市古称。古代、陸奥国
国府(武隈)たけくまのたてが置かれ、名取鎮所が
あった。俳諧大坂壇林桜千句「三本の松の葉こ
しに後の出は本秋、吸物いそげおくの武隈夕鳥」
園田。園田。

たけくま「武隈」宮城県沼市古称。古代、陸奥国
国府(武隈)たけくまのたてが置かれ、名取鎮所が
あった。俳諧大坂壇林桜千句「三本の松の葉こ
しに後の出は本秋、吸物いそげおくの武隈夕鳥」
園田。園田。

たけくま「武隈」宮城県沼市古称。古代、陸奥国
国府(武隈)たけくまのたてが置かれ、名取鎮所が
あった。俳諧大坂壇林桜千句「三本の松の葉こ
しに後の出は本秋、吸物いそげおくの武隈夕鳥」
園田。園田。

たけこうし：カツン「竹格子」名 ①竹を組み合わせた作ったこうし。また、竹を組んで作った垣根。多く中流以下の家のつくり用いられた。浮世草子「好色一代男」二四「竹格子(タケカウシ)の内面に影見ずかかへらまし。談義本・教訓万病回春四・離魂病評かの長明が竹の柱よりも竹格子に石り店(たな)の気散じとて。硝子戸の中夏目漱石一七「芸者屋の竹格子(タケカウシ)の窓から、今日はな」と声を掛けられたりする。②①が妾宅などのつくりによく用いられたところから、妾宅をさしていう。また、そこに住む妾。雑俳折句袋「竹格子又も伯父御を誕生有」(開園タケカウシ)名

たけこうり：カツン「竹行李」名 竹で編んで作った行李。赤痢石川啄木「小竹行李」編んで前後に肩に掛け。放浪時代(龍胆寺雄)二四「壊れた小さな竹行李(タケカウリ)」(開園タケカウリ)名

たけこし：カツン「竹越三郎」歴史 家。埼玉出身。号は三又。慶応義塾を卒業後新聞界にはいり、時事新報、大阪公論、国民新聞等の記者として活躍。陸奥宗光、西園寺公望の知遇を得、雑誌「世界」の主筆をつとめた。のち官界にはいり渡欧二回、衆議院議員当選五回。宮内省帝室編纂官長、貴族院議員、枢密顧問官等を歴任。主著「二千年五百年史」「日本経済史」など。慶応元・昭和二五年(一八五—一九五〇)

たけこま：カツン「竹独坐」名 竹で作ったこま。竹筒の上下を木でふさぎ、胴に穴をあけたこま。回すと高音を発する。唐独坐あり。こま。随筆「守貞漫稿」三三「文政頃竹独坐あり。昔よりある歌未考前漫の錢」まともこま「小児の弄物也」(開園タケコマ)名

たけざわ：カツン「竹細工」名 竹を材料とする細工。またその細工物。浮世草子「日本永代蔵」三・五此所は、桑の木をさし物竹細工名人あり。雑俳「花紋日有馬よりよふはし物の竹細工」。西洋道中膝栗毛「毛繪生寛一五下集鴨の菊細工」。竹細工(タケザイ)「瀬戸物細工日本人の人は器用なものはねいだらうと思ふぞ」(開園タケザイ)名

たけざわすえな：カツン「竹竿」名 竹のさお。たかさお。権記長保元年一〇月二七日「次元倫以荒文竹竿、為親進來就膝突」。日葡辞書「bamboo タケザ」。苦の世界(宇野浩二)二・三「大きな竹竿の網を両手にさかへて」(開園タケザイ)名

たけざわんせい：カツン「竹杖」名 竹の杖。鎌倉後期の武将。肥後国熊本の人。文永・弘安の二回の元軍の来襲に際して戦功をあげた。その合戦の様子を描いたものが「蒙古襲来絵詞」二巻である。生没年未詳。たけざわんせい「竹小簡」名 旅行や行楽などの時、酒を入れて携帯する竹筒。さえ。たけざわんせい「名」丸竹を縦に割ったもの。わりだけ。浄瑠璃(東鑑御符卷一)「コリヤイ其割竹(タケザ)がびつとでもさるがさいい、片端さ首ひっこぬくとゆつたりびくびくすべいがそふはせない」たけざわんせい「名」(「竹杖」)木の葉やごみをさらうのに用いる竹製の農具。長い柄の先に粗い歯をつけた形のもの。浄瑠璃(傾城島原合戦旅の素足)「土をすくは竹ざらえ箕をはた物に不吉の印」たけざわんせい「竹沢」(「たけざわ」とも) 姓氏の一つ。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

たけざわんせいといひと：たけざわんせいといひと「竹沢先生と云ふ人」小説。長与善郎作。大正一三—一四年(一九二—二五)発表。主人公竹沢先生の死後、弟子塚本が手紙、随筆集などに基いて先生の思想や生活を回想するという形式をとる。竹沢先生を通して作者自身の人生観を表わした独特な思想小説。(開園タケザイ)名

二、今昔大和国、高市の郡、八多の郷に小嶋山寺と云ふ寺有り。...

たけちすいさん(武市瑞山)江戸末期の志士。名は小橋。通称、半平太。...

たけちす(竹鉄)名、鉄の一種。細くけずった竹を色糸で編んで...

たけちのくろむと(高市黒人)奈良前期、文武朝の歌人。...

たけちのみこ(高市皇子)天武天皇の第一皇子。母は胸形君子の娘。...

たけちよう(たけちやう)竹町(一)東京都中央区京橋三丁目。...

たけつ(多血)名、盗人仲間隠語。...

たけつ(多血)名、(一)体の血液の量が多いこと。...

たけつ(多血)名、(二)形動、物事に、容易に感動すること。...

たけつ(多血)名、相反する利害関係にある二者が、互いに折れあつて話をまとめること。...

たけつ(多血)名、竹で作ったつえ。...

たけつ(多血)名、植物「こめつが(米根)」の異名。たけつかん(多血漢)名、多血質の男。...

たけつ(多血)名、(一)古代ギリシアの医学者ヒポクラテス以来の気質の分類の一つ。...

たけつ(多血)名、(二)形動、皮膚などの血色がよく生き生きしていること。...

たけつ(多血)名、(三)形動、皮膚を射るやうに視線のなかに感じさせる。...

たけつ(多血)名、(四)形動、竹を横に切断して作った筒。...

たけつ(多血)名、(五)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(六)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(七)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(八)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(九)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十一)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十二)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十三)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十四)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十五)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十六)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十七)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十八)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(十九)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十一)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十二)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十三)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十四)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十五)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十六)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十七)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十八)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(二十九)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

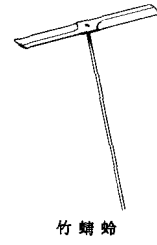
たけつ(多血)名、(三十)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(三十一)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけつ(多血)名、(三十二)形動、竹の節を削り、その底部に節ふしを残して、...

たけとりものがたりしよう たけとりものがたりセウ「竹取物語抄」

たけとりものがたりしよう たけとりものがたりセウ「竹取物語抄」



竹舟

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

す。紀伊国物語上「何も竹流の金子などを能きほ

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけなな「竹中」姓氏の一つ。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

たけのうち「竹内」奈良県北西部、当麻町の地名。

講(似合たり、竹の子奉行やぶにらみ) たけのこ(むし)「節虫」ウマ、エの幼虫。馬やロバの胃内に寄生し、節状を呈する。

たけのこめし「節飯」名。細かくきざみ、しょうゆなどで煮詰めて味つけた竹を入れたたきあげた飯。《季・夏》・思出の記(徳富蘆花二・九)彼女(かれは)節飯を製(こ)して、削(へ)て倒れんとする僕等に供するものである。〔閉園會之図〕食之。

たけのこめばる「節目張」名。カサゴ科の海水魚。カサゴに似ており全長約三〇センチに達し、体は暗灰色で暗褐色の斑紋(はんもん)がある。南日本の沿岸に分布。食用とし、関西では節の出るころ美味するといふ。〔閉園會之図〕

たけのこめん「節面」名。丸い床柱の下方前面を平らに削ったもの。その部分が節のような形になるところからいう。〔閉園會之図〕

たけのこもち「節餅」名。菓子の一つ。群馬県高崎市の名物。白もちを小さく一口大にちぎり、あずきのこしあんをつけて、竹の皮に包んだもの。〔閉園會之図〕

たけのことうた「竹の里歌」歌集。正岡圭規作。伊藤左千夫編輯。明治三七年(一九〇四)刊。長歌一五首、短歌五十四首を集成した遺稿集。〔閉園會之図〕

たけのこたの戦(たか) 建武二年(三三五) 二月一日駿河国(静岡)竹之下で行なわれた足利尊氏と新田義貞との戦い。鎌倉で建武政府に反旗を翻した足利尊氏と、これを鎮圧しようとして東下した新田義貞とが戦って、義貞が敗走し、南北朝の動乱が始まった。〔閉園會之図〕

たけのしんじ「竹野神社」京都府竹野郡丹後町にある神社。旧府社。祭神は天照大神。崇神天皇に仕えた丹波大県主基理の娘竹野媛が開創したと伝えられる。〔閉園會之図〕

たけのはし「竹橋」石川県中部、津幡町竹橋(たけはし)のこと。俱利伽羅(くりにがら)の西側のふもとにある。義経記一七・平泉寺御見物の事「その日はたけのはしに泊り給ひて、明くれば俱利伽羅(くりにがら)山を越えて、浄瑠璃(じやうるり)凱陣(がいじん)八島(やしま)二竹(たけ)のはしわたるもつらき、身のあだ成はいしの火うちか」〔閉園會之図〕

南部地方(19) ②昆虫、ななふし(七節)。神奈川県津久井郡28 静岡県磐田郡水窪58 たけのふしむし「竹節虫」名。昆虫「ななふし(七節)」の異名。〔閉園會之図〕

たけのふしむすび「竹節結」名。緒の結びかたの名。〔閉園會之図〕

たけのふしちんま「竹節欄間」名。竹の節を立て、上下に横木(よこぎ)を通し、あいだに対角線状に棒(たすき)を入れたもの。脇障子(わきしょうじ)上、長押(ながし)上などに用いる。〔閉園會之図〕

たけのぶよし「たろう」エトヲラウ「武信由太郎」英語学者。鳥取県出身。札幌農学校卒業。『ジャパン・タイムズ』英語青年を創刊。のち、早稲田大学、東京高等師範学校教授を歴任。『武信和英大辞典』を編纂。また、多くの英語教科書を著わした。文久三・昭和五年(一八六三—一九三〇)

たけのぼろ「長上(關上)」「百四」知力・才能などが人に長じ、高い程度にほれること。*きやどべかどる上。一。其知恵にたけのぼろたるをひては、只此第一儀を負り見て少しも他事を尋ねべからず。〔閉園會之図〕

たけのみや「多氣宮」竹宮。伊勢国三重県多氣郡にあった伊勢の皇大神宮に奉仕する斎宮の宮殿。たけのみやと。大和三六(か)の斎宮のおはします所はたけの宮となむいひける。*倭姫命世記(皇太神の御杖代として、多氣宮造奉て斎慎み令侍給き)。八雲御抄(三)斎宮のみや八群行以前御在所(たけのみや)八伊勢御在所(い)つきの宮(いはみや)。*俳諧はなひ草(寛永二十年本)「竹の宮(神祇也)。うへ物にあらず。〔閉園會之図〕

たけのみやこ「多氣郡」多氣宮(たけのみや)の所在地。斎王の居所を皇居の延長と見ての呼称。*散木奇歌集(雑上)「思へただたけの都はかすみつつしめの外なるみのけしき」。*詠太神宮二所神祇百首和歌(五百枝)刺竹田の園とも斎宮之事也。昔天の香久山の竹を根越にして植けりとそ、竹の都と云。*俳諧、西鶴大句歌四「伊勢の津を云出す事もなかり鬼連(名)名所は竹の都路」。〔閉園會之図〕

たけのゆき「竹雪」能楽の曲名。四番目物。宝生流、喜多流。作者未詳。越後国の直井左衛門の子月若は、まま母にいじめられ、大雪の中で着物を脱がされた上に、竹の雪をまわされてこころえ死ぬが、竹林の七賢が哀れんで月若を生き返らせる。〔閉園會之図〕

たけのれん「竹籬」名。細い竹または細く割った竹を短く切り、糸を通して作った店先などにつるすのれん。たけのれん。〔閉園會之図〕

たけは「名」。イワンがカツオなどに追われ群れて海面が盛りあがっているところ。静岡県(の)漁村でいう。〔分類漁村語彙〕

たけはし「竹筥」名。竹を削って作ったはし。*日葡辞書「algebra(タケハシ)」。*浮世草子「好色二代男(五・四)着物こしらへ、其散し形に、欠五器(竹筥(タケハシ)、めんつう、其もの持る道具を品々切付して)」。*美人草(夏目漱石一八)捕(そ)へて渡す二本の竹筥(タケハシ)を。〔閉園會之図〕

たけはし「竹橋」(正しくは「たけはし」)東京都千代田区、北の丸公園の東南方にある橋。江戸時代は、江戸城の内堀にかかる橋の一つで背後に竹橋門があった。①「たけはしもん(竹橋門)」の略。〔閉園會之図〕

たけはし「竹梯子」名。長い二本の竹に、木材を横の段として結わえて作ったはし。また、それを模した玩具。*随筆(守貞漫稿二五)「江戸弄船中に防火の具を模造し児童も専ら愛之。略(竹)階子長二三尺或は一尺許もあり。〔閉園會之図〕」

たけはし「竹梯子」名。竹の梯子に踏板をとりつける繩の結び方。〔閉園會之図〕

たけはし「竹橋」名。長い二本の竹に、木材を横の段として結わえて作ったはし。また、それを模した玩具。*随筆(守貞漫稿二五)「江戸弄船中に防火の具を模造し児童も専ら愛之。略(竹)階子長二三尺或は一尺許もあり。〔閉園會之図〕」

たけはし「竹橋」名。長い二本の竹に、木材を横の段として結わえて作ったはし。また、それを模した玩具。*随筆(守貞漫稿二五)「江戸弄船中に防火の具を模造し児童も専ら愛之。略(竹)階子長二三尺或は一尺許もあり。〔閉園會之図〕」

たけはし「竹橋」名。長い二本の竹に、木材を横の段として結わえて作ったはし。また、それを模した玩具。*随筆(守貞漫稿二五)「江戸弄船中に防火の具を模造し児童も専ら愛之。略(竹)階子長二三尺或は一尺許もあり。〔閉園會之図〕」

たけはし「竹橋」名。長い二本の竹に、木材を横の段として結わえて作ったはし。また、それを模した玩具。*随筆(守貞漫稿二五)「江戸弄船中に防火の具を模造し児童も専ら愛之。略(竹)階子長二三尺或は一尺許もあり。〔閉園會之図〕」

たけはやし「竹林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

たけはやし「武林(武林) 姓氏の一つ。〔閉園會之図〕

(熱田本訓)時に道臣命案に賊害(そこなはむといふ)心有るを知りて而して大きに怒りて誹嘆(タケヒコロヒ 別訓なし)て曰く

たけひさゆめじ「竹久夢二」画家、詩人。岡山県出身。本名、茂次郎。感傷的な詩文、挿絵をかき、その美人画は流行二式と呼ばれて、明治末から大正にかけて大いに夢二の代表作「女十題」「長崎十二景」明治一七昭和九年(一八八四—一九三三)

たけひし「竹藪」名。戦場用いる具。敵の襲撃に備えてまき散らす鉄藪(てつし)にならって、竹を削ってこしらえた藪の実形をしたもの。*播州佐用軍記「土四船見川渡にて寄手を防之事」草の袋に入れて持たる鉄藪(てつし)を略時たりける

たけひし「竹日」名。植物「めいしは(雌日)」の異名。*重訂本草綱目啓蒙「二・隰草」藩公略馬唐はめいしは略めしは薩州、たけひしは石州

たけひなわ「ひなは」竹火繩「名」(たけびなわ)とも。火繩の一種。竹の皮の繊維をなべて火繩としたもの。*日葡辞書「Feghinha(タケビナワ)」非語、七柏集「雪中庵興行」客連て鉄藪かつく竹火繩(探簾)刀望の江戸をひたすら金雨」*歌舞伎忠臣蔵形容画合簡は持たねど道草に、火打がはりの竹火繩(タケビナワ) (閉園會之図)

たけびやうたん「ベタン」竹藪「名」竹につけた藪。*浄瑠璃・金洲双段巴中三尺四方に切破り、内を覗ふ竹藪、がらつかすれと寐入りばな

たけふ「竹生」名「たかふ(竹生)」に同じ。*書紀「安閑元年閏二月(寛文版左訓)仍て上の御野(み)の下の御野上の桑原下の桑原并(なら)に竹生(タケフ)別訓(たかふ)の地(ところ)を奉献(り)に

たけふ「竹節」名。田舎で、連続した二子(に)しが一間隔てて平行に並んでいる形。確実な連絡形としてよく用いられる。竹の節に形が似ていることからこの名がついた。二丁継ぎ。竹のふし。

たけふ「武生」福井県中部の地名。日野川の中流域にある。古代、越前国の国府が置かれた地で、江戸時代は福井藩支藩。本多氏の城下町。在来の刃物、蚊帳工業とともに、石灰窯業・合金鉄・縫製・塩化ビニールの近代工業が行なわれる。昭和三年(一九四八)市制。*備前楽道の口「道(みち)の口、太介不(タケフ)の国府(こ)に、我(わ)はありと」*源氏浮舟「たけふのこうに、うつろひ給ふとも、忍びては参り来なんを」 (閉園會之図)

たけぶ「建」猛造「百六二」たけだけしいふるまをいする。また、雄々しくふるまう。*古事記「上」伊都八二字、音を以るるの男建び八建を訓みて多郎夫(タケフ)と云ふV踏み建びて。*万葉九・一八〇

九「叫びおらび土をふみ牙喚(き)み建怒(た)けびて」(虫麻呂歌集)。*万葉一・二三五四「健男(ますら)のおもひ乱れて隠せるその妻、天地にとほりてるとも願れめよも八云大夫(ますら)を」の思ひ多鶏備(タケビ)てVへ入麻呂歌集

たけぶえ「竹笛」名。篠竹で作った横笛。篠笛。*鉄幹子(手)謝野鉄幹(晩秋の歌)くれゆく秋のさびしさたけぶえ「竹笛」名。吹舞伎下座(音楽會之図)

たけぶえ「竹笛」名。吹舞伎下座(音楽會之図)三味線の旋律に竹笛の音を合わせたもの。篠入り。*歌舞伎名歌徳三坪玉垣四立「此文句の切に下座へとり、摺紐(た)ふへ入りの浮いたる鳴物に成り」*歌舞伎家図彙「三竹笛入の合方八腹切場あり」 (閉園會之図)

たけぶき「岳路」名。植物「はんかいそう(笑噴草)」の異名。*日本植物名彙松村任三「タケブキチャウリ」ウサウサウハンクワイサウ望江南

たけぶん「竹文箱」名。手紙を入れるための竹筒。*日葡辞書「Feghinha(タケブン)」

たけぶん「武文」能楽の曲名。秦武文(はたのたけぶん)は一院御息所を守護して京から土佐へ下向した。途中尼崎で松浦兼(なが)がしに御息所を奪われて武文は切腹し、のち怨霊となつて松浦を殺す。座曲。幸若舞曲「新曲」と同材。

たけぶんに「武文」名。「へいけがに(平家蟹)」の異名。*本朝食鑑「一〇蟹令亦効武文蟹」*歌舞伎文蟹者(蟹)と。和漢三才図会「四六」鬼蟹(タケブンカニ)しむらかに。俗云武文蟹。其小者名三島村蟹」*略元弘之乱、秦武文(はたのたけぶん)死す摂州兵庫海。故兵庫及播州明石浦之鬼蟹俗呼曰武文蟹」 (閉園會之図)

たけべ「武部」姓。姓の二つ。 (閉園會之図)

たけべ「あやたり」(建部被足)江戸中期の国学者。読本作者、俳人、画人。俳号、涼菴。画号、寒葉齋。江戸で生まれ、弘前で育つが兄嫁との不義により二四歳以後家郷を出奔、諸国に居住した。国学の面では賀茂真淵に師事し、片歌の提唱者として著名。また、読本の先駆的作品「本朝水滸伝」「西山物語」を著わすなど多方面に活躍した。享保四(安永三年)二七一九(七四)

たけべ「かたはろ」(建部賢弘)江戸中期の国学者。江戸の人。通称彦次郎、号は不休。関孝和の弟子。孝和、兄の賢明と共に当時の数学を集大成して「大成算経」にまとめ、また、将軍吉宗に召されて日本算経の作成に当たった。著「算学啓蒙詳解」「綴術算経」。寛文四(元文四年)一六六四(一七三九)

たけべ「そらう」(建部果光)江戸中期の俳人、画家。江戸の人。書家山本龍斎の子。名は英親、別号は秋香庵、黄雀など。俳諧を春秋庵白隠に、画を谷文晁に学んだ。閑屋の里に隠栖。閑屋の果光と呼

ばれ、夏目成美、鈴木道彦とともに江戸三大家の一人と称される。編著「せき屋せう」など。宝暦一〇(文化一一年)一七六〇(一八一四)

たけべ「とん」(建部彦吉)社会学者。新潟県出身。東京帝国大学教授。貴族院議員。ユントの影響の下に、有機体的社会観にたつて、日本ではじめて社会学を体系化した。主著「理論普通社会学」。明治四(昭和二年)一八七(一九四五)

たけへ「竹割」名。竹を薄く削り切ったもの。*歌謡「閉吟集」鎌倉へくだる道に、竹へげの丸はしをわたひた、鳴木も候へども候へど、にくひ若衆をおちいらせうとて竹へげの竹へげの丸はしをわたひた

たけべ「じんじ」(建部神社)滋賀県大津市瀬田にある神社。旧官幣大社。祭神は日本武尊ほか。尊の子建部稚依(たけべい)なよりわけ)王が景行天皇四六六年に神前郡建部郷の千草嶽に創建したと伝えられる。のち瀬田郡の大野山に移り、さらにふもとの現在地に移る。近江国の一宮。 (閉園會之図)

たけべ「竹」名。①竹を削って作ったへら。*和玉篇「釋」タケベラ「浮世草子、西鶴編留三、四「定木(ち)やうき」竹べら、はけ糊(は)持(もち)て」*談義本「風流志道軒伝」「茶の湯は、古茶碗、竹べらなどに千金をつひやして」②たけみつ(竹光)①と同じ。*雑俳「柳多留一〇」竹べらをぬくと切みせ(る)じを打」*滑稽本「東海道中膝栗毛三下」竹篋(タケヘラ)を滑(す)てしてしまし男ぶ(り)くつぶしとはもふいはれまい」 (閉園會之図)

たけぼうき「ばき」竹箒「名」葉を落とした竹の小枝をたばねて、適當な長さに切った竹の幹を柄としてたぼうき。地面をはくのに用いる。たかぼうき。たけばはき。*浮世草子「好色二代男」一三たつが帯に、竹箒(タケボウキ)をささせ。 (閉園會之図)

たけぼうき「原方言」キ・タカボキ(原方言) (閉園會之図)

たけぼうき「五百羅漢」(ひゃくからかん)たけぼうきのような何の変哲もないもの。信心したいようしては、五百羅漢に思えるという。深い信仰心に対する霊験の不思議な力という。また、頑迷な信心をかかっていることもある。鯛(い)わしの頭も信心から。たかぼうきも五百羅漢。 (閉園會之図)

たけぼり「竹木履」名。竹を二つに割って作った木履。 (閉園會之図)

たけぼ「名」草履根の茸草を押える細竹。 (閉園會之図)

たけぼ「竹骨」名。竹で作られている器具や格子

などの骨。*土長塚節八「髪には白い手拭を被って笠の竹骨が其の髪を抑おさへる時に」*二銭銅貨(黒島伝治)「三竹骨(タケボネ)の窓から夕日が、牛の眼に映ってゐた」 (閉園會之図)

たけぼら「竹法螺」名。竹を切った管(くだ)として吹き鳴らすもの。簡貝(つが)い。*歌舞伎藤川船辯話「四立」所々にて早拍子木、竹法螺(タケボラ)、かすめてドンドンになる。*歌舞伎敵討(市)市(正直清兵衛)「二幕」庄屋様で何か御用があると見えて竹法螺(タケボラ)を吹かっしやったが」 (閉園會之図)

たけぼら「竹米」名。たけ(竹)の実に同じ。 (閉園會之図)

たけまら「竹枕」名。竹を編んで作った枕。夏の午睡用に使われることが多い。*季・夏「閉園會之図」だけまつ「岳松」名。植物「はいまつ(這松)」の異名。 (閉園會之図)

たけまら「竹窓」名。竹の格子のついた窓。また、前に竹を植えてある窓。ちくそう。*浮世草子「本朝二十不孝四」二「目に竹窓(タケマド)生あれば食(し)き有と腹ふくるに外の願ひもなし」*談義本「風流志道軒伝」「独(ひとり)竹窓(タケマド)のもとに、日ぐらし眺にむかいて、桑の実(鈴木三重吉)二」女髪結の看板のかかっている家の竹窓には」 (閉園會之図)

たけまわり「まはり」(岳回)名。高山に初雪が降って白くなること。*隨筆「北越雪脚初」上「天気が驟降たる事数日にして遠近の高山に白を点して雪を觀せしむ。これを里言に嶽廻(タケマハリ)といふ。雪国(川端康成)「遠近の高山が白くなる。これを嶽廻(タケマハリ)といふ」

たけみ「猛」名。勇猛をふるうこと。あはれること。*将門記「承徳三年」いよいよ跋扈の猛(タケミ)を成して、悉く合戦の方(みち)を構ふ

たけみかすち「かみ」たけみかすち「建御雷神・武甕槌神」日本神話の男神。天照大神の命を受けて出雲に降り、事代主神・建御名方神を服従させ、大國主命に國譲りをさせた神。神武東征のとき、靈剣を天皇に献上したともされる。 (閉園會之図)

たけみくまり「じんじ」(武水別神社)長野県更埴市八幡にある神社。旧県社。祭神は武水別神・菅野別命(はむだわけのみこと)ほか。孝元天皇の頃の創立と伝えられる。 (閉園會之図)

たけみくまり「じんじ」(建水分神社)大阪府南河内郡子早赤阪村にある神社。旧府社。祭神は天御中主命・天水分神、罔象女命(みずは)のめ(みこと)、国水分神。崇神天皇の頃の創立と伝えられる。建武年間(一三三四—一三六)補正成が再建。 (閉園會之図)

たけみじか「丈短」形動。丈が普通のものより短くさま。*浮世草子「武道継穂の梅」二「もとより武太



竹箒 (武家義理物語)